

第5回旧遷喬尋常小学校校舎整備・活用検討委員会会議録

日 時 令和元年5月30日(木)午後3時

場 所 久世エスパセンター学習室

出席者

委員)岡山理科大学工学部建築学科教授 江面嗣人、まにワッショイ代表 岡本康治、真庭市立落合小学校校長 奥山仁、東京大学生産技術研究所教授 腰原幹雄、清水塾塾長 清水慎一、真庭観光局地域マネジメント部マネージャー 眞柴幸子、元真庭市文化財保護審議会委員 森上知洋、シネマニワ代表 山崎樹一郎、岡山ヘリテージマネージャー機構美作地域会 山崎真由美、真庭市副市長 吉永忠洋
オブザーバー)岡山県文化財課 横山 定参事、助言者)新東住建株式会社 芥川英佑(事務局)生活環境部長 澤山誠一、教育委員会教育次長 網島直彦、スポーツ・文化振興課長 大塚清文、生涯学習課長 佐山宣夫、スポーツ・文化振興課参事 岩野哲治、生涯学習課参事 森俊弘

大塚課長)

定刻となりましたので、ただいまから、第5回旧遷喬尋常小学校校舎整備・活用検討委員会を開会します。

本日は、井上委員と遠藤委員が諸用により、ご欠席でございます。本日の出席委員10名で会議を開催させていただきます。

本日の資料の確認ですが、委員会次第(資料1～5)、席次でございます。皆様ありますでしょうか。今日はオブザーバーとして県文化財課 横山参事、並びに建築の件がありますので、新東住建の芥川さんに出席していただいております。

開会に先立ちまして、江面会長からご挨拶をいただきたいと思っております。それでは、会長よろしくお願いたします。

江面会長)

今日は構造補強とか観光の戦略とか、それを踏まえて提言素案について考えていただきたいと思っております。ようやく形が見えてきたと思っております。積まれて置かれるだけの提言ではなく、具体的に生きていくものにしたい。そんな検討をしたいと思っております。忌憚のないご意見を願いたします。

大塚課長)

それでは協議事項に入ります。これよりの進行を江面会長に願いたします。

江面会長)

はい、今日は副市長が議会の関係で早退されますので、次第の順序を変えて最初に構造補強について、それから観光戦略については、市の方々も理解しているのですが、提言の内容に、観光戦略の苦労してきた内容を少し盛り込んでもらいたいと思う。大事なことが含まれているので、その辺も聞いた上で議論していただきたいと思っております。その次に今後の委員会の進め方とかワークショップの開催とかの議題があります。今後の活用に関係してくる構造補強案について、具体的に金額や工期について事務局から説明してください。

大塚課長)

(資料1により説明)

今回の構造補強案については、前回調査していただいた新東住建に発注しております。新東住建の芥川さん補足などをお願いします。

芥川氏)

大まかには資料のとおりですが、躯体の補強のためには全体的に持ち上げて、地盤の補強をしなくてはならないことが大前提です。切り離すやり方は効率が悪く、莫大な費用がかかるので、一番効率の良いやり方として、最短で教室等を最初に工事をやり上げてしまい、残りを工事するやり方で示しています。レエベータ棟トイレについては、実施設計の話になり文化庁との協議もあるので、私からは申し上げられません。両案の見かけの違いですが、鉄骨フレームは鉄骨の柱を下から上まで通して全体を補強しますので、教室の左右に柱が、全体で6本6本計12本通して、全体の補強をします。少し費用は安くなるが、教室内に鉄骨が見えることになりますので、どう考えるかになります。

江面会長)

本来であれば構造補強案は確実に必要です。実際に活用する場合、中を使うか使わないかどうか。使うのなら構造補強しなくてはならない。活用と一体となって考えていく訳ですが、今回は使っていくということであるから、構造補強はせざるを得ない。どういった工法をとるか。実際には検討委員会の後、修理が始まって、今度は修理委員会が出来てきてそこで検討されると思うが、皆様の頭の中にも、こういった構造補強が必要なんだということは分かっておいてほしいと思います。以上の話にも理解の差があると思う。腰原先生のように超専門家からそうでない方もあるので、建築にかかわっていない方の質問があればどうぞ。岡本さんどうですか。

岡本委員) 合板か鉄鋼かとなると鉄骨がむき出しでは、映画の撮影などとなると鉄鋼の方は使えない。新しい付属棟を作って活用を続けてほしいと前回言ったのですが、その方が活用を続けていけると思います。この資料には含まれていないようなので、もしやるとなったらどうなるのかなって思いました。

江面会長)

付属棟を使ってというような、今の意見についてはいかがでしょうか。これは予算の関係もあるだろうが、もう少し具体的に建物をどうするかという話になれば、いずれそういった話ができてくる前提で考えていただきたい。山崎さんいかがですか。

山崎樹委員)

むき出しか、そうでないかとなれば確実にむき出さない方がよい。映画の撮影で知名度が上がっているが、4年間の間使えない、使えるまでの準備も考えなくてはならない。

江面会長)

合板でやった場合、完璧に外に補強材が出てこないのならいいのですが、その辺どうですか。

芥川氏)

壁に空洞があるので、そこに耐力壁を入れることができるし、床下と小屋裏に入れることができます。

江面会長) 腰原さんどうですか。

腰原委員)

議論が急に飛んでしてしまっている気がするので、細部について話しをするのか、選択肢を狭めすぎている気がする。答えとしては分かるのですが、いままでの文化庁的な修理の仕方ということでは、保全が目的で活用ではないので、きれいに時間をかけて元に戻そ

うとする。多分これが答えなんだろうと思うのだけれども、これから活用について考えていく訳であるが、合理的という言葉は文化財的価値としての合理的と活用としての合理的ということと違うのではないかと思う。部分使用しての方法ではコストはかかるということだが、いくらぐらい増しがかかるのかという場合に、その対価と活用の停滞との比較で考えると、建物の修理では合理的でないかもしれないが、まちづくりの価値からは、それぐらいの増しをしても部分使用してやれたほうが良いという考え方もある。文化庁もいままでのやり方ではだめだと分かっている、継続的に部分的に修理するようなことを認めるような方針を出そうともしている。これだけではなくて、皆さんに選択肢として、こんな可能性があるのだけれども、これはコストかかり過ぎるのでどうしますかというものもあるし、今のコストについても、ジャッキアップするかしらないかでかなり違う気がします。床をはがして、不陸調整ぐらいだったらジャッキアップしなくても済むような気がします。選択肢があらかじめ絞られすぎているところで議論すると、今のような案になる訳だし、設備的にもっと出すのかというのものもある。どうにかして部分的に半分でも継続的に使っていける方法はないかとかを突き詰める作業するチャンスが、このプロジェクトには無いのかの議論をしなくてはいけないのではないかと思う。なんとなく今突然にこのペーパーが出て、どういう意味付けなのかなって思っています。

吉永委員)

私どもも資料を見せられて、いきなりこうなのかと実感として思っています。議論していたことと違うんですね。非常に不安になってしまった。それでも、文化財的にはこれしかないんだと言われると分からない。部分的にやるとお金がかかる、では、いくらかかるのかというものを判断材料として出してほしかった。担当課として、何を業務委託して何をやろうとしたのか、正直言って不明確だというのは市長も私も同じ意見だ。

腰原委員)

逆に言うと、発注的に使えない期間が無いような改修方法を提案してくださいといってもいい。これは通常の文化財の修理で、いままでのように修理をしながらやりましょうという多分これなんだろうと思う。これ自体は間違いではないけれども、これに対し、精神的に文化財の活用を踏まえた新しい取り組みをするんだ、という覚悟があるとするのだったら、発注のやり方がまずいのかもしれないし、今の文化庁の目指している背景とか、情報を詰めておくことが必要であると思う。

吉永委員)

江面先生、腰原先生と話をせずに、これが出てきてこれが前提だと言われるとちょっと困る。

江面会長)

全くこれを前提に話すのではなく、これを土台に、こうではない他の方法もあるんだという話でもいいと思う。今後、具体的に詰めていかなくてはいけない。一般的なやり方が出てきたということだと思う。腰原さんが言われたように、使いながらやる方法もあるんだということだが、使いながらやるということも前提では無くて、なぜそうゆう風にするんだというストーリーも作っていかなくてはいけない。文化庁が最もお金を出すので、やっぱり説得するためのストーリーが大事。こちら側がこういう使い方をしたい、考えているという必要がある。文化庁も近年、変わってきている。昔、平成の初め頃は、時代を設定したらそれ以外は無いと言っていたが、今はそうでもない。今までは保存ありきであったが、近年は活用のための修理、どう使っていくかということもある。でもそれで耐久性

が半分になるというのではだめであるけども。しかし活用をするのであったら、それをどうゆう風にストーリーを作っていくのかといったことになる。一応こういう案でこういうやり方もあるということで、もう少し、具体的な案が出てきたときに考えていきたいので、これは頭に入れておいていただき、全体で話が詰まっていったときにもう一回議論したい。(山崎委員)

今、すごいデジャブ感がある。前に議論したが、江面先生が他の方法もあると言われていて、もう1回調べてもらったらこれが出てきた。4年間使えない案が出てきたので、これで進むのかなと感じた。

吉永委員)

これしかないっていう論点になっている。付属棟の話にしても、それがどう役に立ってどうなるのか、それはできるのかということや、この状態で人が来るのかといった議論もできていない。付属棟があるとして進める話もおかしいと思うし、先生が言われたように、どう使っていくのかという議論をもう少ししないと話ができない。比較材料を出していただきたい。腰原先生がおっしゃるような議論ができない。判断できない、これでは。

江面会長)

もう少し活用について具体的な方法が煮詰まったときに議論したい。こういう活用案であれば、このほうがいいねといった話をしていきたい。はっきりこう使いたいといった話が出てきたときに議論していただきたいと思います。

次に、真庭市の観光戦略についてに移るが、真庭市には既に観光戦略があり観光について考えているんです。かなり充実していてワークショップも何回かして住民との話し合いもしていて、なおかつ、観光地域という戦略もあり、進んでいるようです。前にも話したように、文化財の在り方というのは観光の在り方とよく似ており利用していくべきと考える。そこを是非、文化財の活用と照らせ合わせたいし、皆さんからも意見をもらいたい。活用の方法を一から考えていくのと、既に議論が進んでいるものがあるので、使わない手はないと思うので観光で出ている話を伺いたい。それを聞いて提言素案に移りたい。(大塚課長)

前回の会議でもご意見をいただいております、真庭観光局の眞柴さんに話をお願いしています。

眞柴委員)

(資料4に沿って説明)

清水委員)

今、眞柴さんが言われたように、本当に真庭の観光について話し合いました。皆さん方は、観光というと湯原温泉や蒜山高原に行ってジャージー牛乳を飲んでといった観光を思われるかもしれないが、もう飽きられてきました。外国人のインバウンドがあります。中国人の爆買は3000万人のごく一部です。外国人ははっきりとだめなものはだめ、地元に関係のない食材を出すような旅館はだめだと言います。或いは外国人が求めているのは、景観と雰囲気、街並みです。これは真庭観光戦略をマーケティング会社に任せてやったのではだめで、お客さんが求めているのは景観と雰囲気、街並みです。そこにしかない歴史などを感じる。残念ながら多くの自治体が深く考えず、旅行会社の言いなりでやっている、町を平気で壊している。それはだめだということがはっきりしてきた。あちこちの温泉街が軒並みそれだ。景観とか雰囲気や歴史などを大事にしてきたところは強い。意識せずやった温泉街、残念ながら湯原も苦戦している。やっとな観光が変わってきた。この動

きをうまくこれを利用すれば、自分たちの暮らしの質を上げることができる。お客様に地元のもの食べてもらい買ってもらう。そういった観光をやっという形ができてきました。これは観光客主体でなく住民主体。資源は温泉や施設でなく景観、街並み、地域の暮らし。なりわいです。こういったものを旅行会社がマネジメントすることはあり得ない。地域が自らこういうものを使っていく。これを回すポイントは住民の誇りです。これがないと観光客は来ません。そういう話を観光戦略のときにしました。単なる温泉や商店を紹介している観光協会はやめよう。こういう人がこういう活躍をしている、これをお客様に示すことによって、お客さんと一緒になって楽しんでいく仕組みにしようとした。これがいまのDMO考えです。住民の誇りの源泉となる旧遷喬尋常小学校、そこにお客様にきていただいて一緒に楽しむ。そういう考え方です。

江面会長)

ありがとうございました。前から話している住民主体、アイデンティティといった文化とか歴史とか、暮らしの質を上げるとか街並みとか、これは文化財をどう使っていくかという非常にいい例である。参考事例といえる。観光はいままでの町ツーリズムではなくて、最近ではエコツーリズムといった言葉も出てきた。大きな方向が変わってきている。それを文化財の分野でも明確に抑える必要がある。特に、今日の説明があまり無かったところだが、後々の体制の強化するところ。ただ単に、コンセプト、考え方を整理すると、地域づくりというのは、これまで議論していただいたように人づくりということになる。考え方は極めてよく似ている。観光の取り組みで分かるように、実際にどういう体制、システムにして、どういくふうにしていくのかを考えるとすると、文化財のほうも大きな目標というか、人づくりをどのように進めていくのか、そういくことも議論し、考えていかなくてはならない。地域づくり、人づくりとは何なのか、そこまで考えていかなくてはならない。人づくりはいい話だけでも、どういうふうにするかという考えがないと、単に案だけで終わってしまう。この観光戦略には、仕掛け、受け入れ環境の整備、立案のブラッシュアップが書いてある。コンセプト、考え方の基本を間違えるとだめで、文化財保護法にも国民のためと書いてあり、抽象的に日本のとは書いていない。人づくりが文化財保護法の趣旨である。次のステップでは、具体的にどうするのかという話になる。

吉永委員)

観光の観点で人づくりの流れが来ているが、もう一つの流れがある。地域振興の観点である。それは里山資本主義真庭のライフスタイルであり、地域資源を生かした経済循環についてはかなり明確にやってきた。それは大きな成果を生んだ。手法として地域振興会社を作った。いま3つできた。旧村単位の小学校単位で、今、旧町村が9つですが、小学校だと24、25ですが、ここでの自治についてはお金が回らないと自治ができないという考え方です。中和地域でスタートし、ここは社会増に転換しました。若者が会社を作って地域資源を使っている。北房では、観光協会という補助金を使う団体であったが、今は商品といった考え方になっている。真庭の考え方は、地域の人が自分たちで持続的に回る仕組みを作るということです。地域資源は、地域であったり、真庭全体であったり、遷喬尋常小学校だったりというのが私たちの明確な考え方です。

江面会長)

真庭では地域振興の会社ができている。ただ単に観光でなく地域の経済的なシステムになっている。そこに文化財がどう関係するのか、遷喬尋常小学校だけでなく真庭全体にある文化財、それらをどうやっているのかということとも関係がある。今日の議題の最後の

提案にまとめるのですが、提言にあたってこういうことが大事なんだということを具体的に結びつけるところまで話し合ってもらいたい。観光のやり方や地域振興会社といったことも参考になる。一方的に話しましたが、皆さんはいかがでしょう。それとも提言まとめについて説明していただけますでしょうか。

吉永委員)

この資料は、これまで皆さんに話してきてもらった、まとめとして考えてほしい。

大塚課長) 資料について説明。今までの会議での提言書とは変わっています。わかりやすい表現にしています。提言にあたってという表現にしています。抜けているところなどをご指摘をお願いします。

江面会長)

今、資料について説明があった。これに対して意見、整備活用の方向、観光とも関連させていかがでしょうか。

腰原委員)

この資料のまとめのタイトルの真庭市を隠して出したら、何が違うでしょうか。観光も文化財もそうであるが、真庭市、旧遷喬尋常小学校のタイトルがなければどこに行っても使える文章だ。どこかで具体的にいかなくてはいけない。一般の人が見ると概念はわかるが、ではどうすればいいのかわからない。身近なキーワードがないだろうか。どこに出ても体裁のよい文章あるが、何が言いたいのか分からないことになる。

吉永委員)

これをまとめさせたのは、そういうことだ。この議論がそこから出れていない。次にどうするか、来年というか別のやり方をしないと、この議論をいつまで議論を続けてもここから出られない。

腰原委員)

そのステージをどこかに持って行くのならいいのですけれども、真庭の遷喬尋常小学校から発信ということならば、ぼやけすぎている。

吉永委員)

では、これを見て、何をやるのかということは誰にも分らない。だけでも私を含めこういった議論をやって来た。その議論に入らないと行けないが、来年に関しては、大手の総合研究所ではなく、実際にやっている、若手のすごい人たちの世界的なアイデアも欲しいと思っている。これだけのすごいメンバーで、高いレベルで話しているが、方向性しか出ない、次は具体的にどうするのかといった議論に入っていくかなくてはならない。

腰原委員)

なので、最後のこれからの検討にあたってというところにそういう話が入っていないといけないと思う。前のほうは皆さんが言ったことであり、いろんな勉強をして知識を得た、何か決まったのでは無くスタート台に立ったということである。こういう思想でなくてはいけないよという、当事者として考えていくためにワークショップを一緒にやろうというのが提言である。ここでまとめたのでは無く、市民と一緒に考えていく、何を考えていかなくてはいけないかを決めていくということだ。

吉永委員)

そのあたりのことを案に書いています。

江面会長)

それではそこを見ていきましょう。

岩野参事)

資料2 (スケジュール) について説明

江面会長)

提言書というのはどういう内容をいうのか、また2020年から保存活用計画を始めるというのは具体的なということか。

吉永委員)

具体的ということです。

江面会長)

いかがでしょうか。

清水委員)

観光についてはまだご理解をいただいていないようなので申し上げる。観光の面からですが、観光戦略にあたって、先行的にワークショップを2年間行ってきた。偉い人が集まる会議はやらなかった。市民が集まってやった。私がときどき観光について話し、真庭を外から見て何が必要かといった話をちらちらとやって作った結果だ。100人近い市民議論の結果だ。このような作り方はまれ、ほとんどはコンサルタントが作るか審議会方式だ。これが今の観光を抜本的に変えられなかった原因だ。岡本さん始め、100名近い人が毎月のように集まりやった結果です。ただしその方向性は時々、世の中の動きに合わせて修正しなくてはならない。今回のまとめは大まかなまとめなので、外から見れば当たり前の考え方です。しかし、一番強いのは、この裏側に膨大な市民が主役になる滞在プログラムとかが控えていることだ。問題はそれを実行しなくてはならない。そのためには行政ではだめだ。縦割りだし考え方が固い。既存の行政主導の観光局ではだめだということになったので、全く新たな仕組みで真庭観光局を作り、民間からトップにきてもらって動き出した。今、事務局や市民で1つ1つやっている。10年か20年はかかるだろう。だから久世のまちづくりをやらなくてはいけない。旧遷喬尋常小学校主体でやっていくことになる。久世駅周辺、中町周辺というふうに。一気ににはできない。この委員会の考え方は基本的な考え方であり、今までと違うという考え方だということが整理できて来た。これを市民にきちんと伝えるため、ワークショップをする。自由なところで意見を出してもらおう。2回のワークショップで提言書を書くのは非常に苦しいと感じる。できれば提言後もワークショップを続けて欲しい。観光ではずーっとやっています。こういう考えでやってほしい。

吉永委員)

清水先生のご意見を聞いて、少し反省しています。ちょっと焦った思いです。民間のシンクタンクをいれてバサッとやってしまうようにとらえられたかもしれませんが、そういうタイプのシンクタンクを入れるのではなく、市民議論をやりたい、久世のまちづくりという観点でのワークショップをやらなくてはいけない、2回で足りなければ継続的にやらなくてはいけない。

江面会長)

一応、かなりいい方向に向いてきたと思っています。普通の文化財の活用となると市民、国民という視点がないと何をやってもだめです。どこにフォーカスするのか、何をやらなくてはならないか、明確に確認したい。そういう意味では一つの考え方が見えてきた。清水委員に言っていたいただいたこの考え方、一番初めの会議で言ったと思うが、この会議で言っていることがここだけで終わっては何の意味もない。外に出ていかないと意味がない。外に出ていくとは何なのか。その一つの方法がワークショップだ。次からが施策になる。

普通の施策は投げて終わってしまう。そうではなく永遠に続ける施策もあるはず。恐らく市民教育であり、市民づくりであるなら自転車と同じで、漕ぐことをやめたら倒れてしまう。そのシステムをどう作れるかが大事。次の議論は、何をしなくてはならないか、どういふシステムをつくっていくのかということになる。旧遷喬尋常小学校から価値を市民が享受していかなくてはならない。我々専門家がではなく市民が享受しなくてはならない。これまでの活用の方法はそこまでいかない。どうしても何かに使うという用途変更になってしまう。今回の委員会の提言書でもそこを明確にしていきたい。人を、市民をどうするかが文化財保護の目標だから、観光と全く一緒だ。提言書をまとめて提出するだけでは意味がない。確実に常に市民に投げかけ、常に説明し理解させなくてはいけない。さっき主体性という言葉が出てきましたが、街づくりなどもそうですが、参加してあげるのではなく、主体的ということが大事。次の段階ではそこを考えたいし、そこが見えないと、ぼやっとしたもので終わってしまいます。私が言う人づくりでも言葉で書いてあってもわからない。それが具体的にワークショップというところにつながっていけばよい。いままで経験した他の委員会では目的のところがちゃんと書いていない。何かをやっていって、わからなくなったら目的に帰ることが大事。次のステップでは何をやらなくてはならないのかになるが、これからの検討についてワークショップが2回は寂しい。市民にどう働きかけるかがワークショップだから、そこを明確にし、議論していかなくてはいけない。その議論では工事中、利用を止めないでほしいという声もあるかもしれない。

吉永副市長退席 16:27

奥山副会長)

今日は専門的な話になり、ついて行けないところがあったが、話を聞きながら、何が一番大切なのかを考えてみた。若者の意見を聞くことが大切なのではないか。ワークショップには、ぜひより多くの若者が参加できる工夫がほしい。また、可能であれば外国籍の方の意見もほしいところだ。ワークショップはとても大事で、より多くの市民の参加を得るといふ意味で今日の議論は光が差し来たように感じる。イギリスがEUから離脱するという問題があるが、年代別にみると、若者は離脱に反対で、逆に年寄りには離脱に賛成している。大英帝国時代の誇りがあるから単独でやっていけると考えているらしい。しかし、年寄りはすぐにいなくなり、2回目の国民投票があれば、残留派が多数派になると予想される。これと同じで、未来のことはできるだけ未来に生きる人の意見を採用しないといけない。この地域では若者の意見を3倍ぐらい吸い上げていかないといけないのではないかと、選挙も含めそんな印象を受けた。

江面会長)

若者、よそ者、馬鹿者、女性の意見は大事です。

岡本委員)

ワークショップですが、3年にわたりやってきた。うんざりするほどやった。観光の会議は4年目になるが、清水先生の本の中に「観光は来る人は光を見に来る。こっちからは光を見せる。」という言葉があり自分に響いた。人が少ない時もあったが、その時間の共有は大きく、90数人は一人ひとり釣られたメンバーだ。この人に来てほしい、やってくれるだろうと1本釣りしたメンバーだ。もしワークショップをやるのだったら。一般公募だけだと直前に人がいなくて困ることになるだろう。やっただけのものになる気がする。久世駅から旧遷喬尋常小学校の表裏の周遊ルートに若者が結構いる。だんじり6社全て入っている。手間だろうが一人ひとり声かけて出てきてもらいたい。手伝いもできると思う。

世界へとの話があるが、真庭が世界に誇る映画監督山崎樹一郎さんもいるので、彼の力も借りて遷喬の映像を発信してもらいたいと思うし、議論もいるが色々を使っていきながらではいけないような気もしている。25年間つづく南光亭の次に日に親子寄席をやった。その文化を伝えるという趣旨で。50～60人ぐらい来てくれた。来年は当日の夕方かお昼過ぎに小学生対象でやる提案ももらった。学校には子供が似合うので、昨年、遷喬小学校の校長に、あそこで授業をやってくれないかといったら、是非とってくれた。実際使いながらやるほうがよい、議論は飽きてしまう。パーティーしているうちに議論も深まる。形になる。

山崎真由美委員)

自由で柔軟な優れたシステムが必要だということだが、問題はこの建物で何でもできるということかとも思う。何でもできるから決められない、じゃあワークショップしようかとなってしまふ。私はワークショップが好きではない。熱心な人もあればそうでない人もあり、参加者をかき集めると足を引っ張るという風にもなる。防災をテーマにするとそういうことがよくある。遷喬は久世にあるが、地域として考えるか、真庭市、岡山県、日本、世界として観光の視点で考えるのか、どっちで考えるかになると思う。どっちでもできるので決めかねる。世界へ発信となれば映画という方法もあるし、外国人がインバウンドでやってきてインスタグラムで配信するとか、何でもできる。かえって難しいと思う。私は久世の出身ではなく、設計者の江川氏研究のつながりで関わることになったのだが、遷喬はちょうど広い真庭の中心にあり、ハブ的につなぐようなものであってほしい。市民は忙しくして、何かまたやるのは大変だ。ワークショップするとあれもこれもと意見が出るだろう。結局同じことの繰り返しになる気がする。副市長が言う新しい物を持ってきたとしても市民に負担がかかるし、観光で儲かればいいが、すごいことをやると疲弊することもある。いい思い出だけになってしまう。岡本委員の言ったように、使ってみることが大事なので、そのためには活動団体いる。活動団体が市民に自由に使ってくださいと働きかけてみる。現在は使いたいという団体のみ使わせている状態。まにワッショイのような団体が引き受けて、いろいろな団体に使わせてみて、そこから意見が出てくる方がワークショップよりも見えてくるのではないか。先日の講堂コンサートに行ったが、暑い日で、エアコンもなく窓を開けて行った。使うことでいろいろな事がわかる。使ってみればよい。大々的に使ってくださいといってもいい。また、前回、学びの件を話したが、小学校対象に、例えば遠足でやって来て給食を食べて帰るなどという風に利用すればよい。バイオマスツアーでも旧遷喬にバイオマスを紹介する基地を作って利用してもいい。ツアーでまず教室で紹介映像を見るなど。そういう風に使ってみてハブ的に使うのか地域で使うのか、まだ時間があるので実験してはいいのでは。

江面会長)

使い方については十分議論していかななくてはいけない。ワークショップは大変なのに面白くないという意見がありましたが、それについてはいかがでしょうか。それともう一つ大事なのは活動の拠点みたいなものがあるということがあった。提案の中に確実に盛り込む必要がある。観光の方はそういったことをしっかりとらえている。議論で終わらず転がるシステムを作ることが必要である。

岡本委員)

ワークショップが好きなわけではないが、やっていけばみんなに会いたくなり、楽しみも出てくる。行きたくなる自分があったりする。観光でも最初は陰悪なところもあったが、

今は打ち解けて仲間になった。今では力になっている。いい経験だ。会議だけでは厳しい。楽しくないとできない。

真柴委員)

ワークショップではメンバーは非常に重要。入ってもらう人のポイントを絞って入ってもらって、その人から口コミで広めてもらう。後にもつながる。ワークショップが実働部隊になっていくようなイメージにこの遷喬もなると思う。その人のつながりが勝手に実働部隊になっていく。最初のメンバーは公募だけでなく入ってもらう人には入ってもらって始めるのがよいです。

江面会長)

市民を集めるだけでなく主催する方も考えを持っていなくてはいけない。思想性と批判性を自分の中に持っていなくてはいけない。何のための文化財か、活用かを押さえていないと、ただ集めただけでは長続きしない。明確にメッセージがあり、自分で学べないとだめだと思います。

山崎樹委員)

どんなワークショップにするのか。

大塚課長)

いただいた意見も踏まえ対し、公募もするのですが、30人としているが50人きても受け入れたい。メンバーが大事ということなので、若い人、関心のある人、その気にさせることとのアドバイスをいただいた。口コミでも集めたい。相談させていただきたい。

江面会長)

こういう人にこういうことを言ってもらいたいという組み立てが必要。意図をもって進めることが大切。ワークショップが難しい場合、市民に対し、ここでの議論をどう伝えるか。

腰原委員)

そこが、活用を先にやるということがポイントで、情報提供をして、間接的に文化財についても本を読んでかっちりやろうとするのではなくて、あの建物ツアーでもいいわけだし、イベントと絡めて情報提供して、じわじわ理解してもらおうといい。ワークショップはかしこまった感じがするので、違う方法で集めておいて挟むといい。スケジュールの施設利活用促進が大事で、一番初めの会議であったのは使いにくいという声だった。2022年から工事とすれば3年間ある。工事までなら少々乱暴に使っても修理してくれるわけだ。文化財の価値ばかり重視せず、気楽に接することのできるチャンスである。利活用をどういうルールでやるのかという話と活用の可能性を具体的に話し合う。そこがワークショップだと思う。

山崎樹委員)

ワークショップは奉仕だと思う。湯原などで参加したが。奉仕作業的に順番が回ってき行行って。楽しくなるまでには時間がかかる。メンバーにもよるし。

腰原委員)

自由に使えるようにルールを決めてもらって、かっちりしたところと緩いところを用意しておけば、入り口としては入りやすい。

山崎樹委員)

文化財となるとどうしても固苦しいイメージがある。

清水委員)

腰原委員の意見に賛成です。ワークショップの意味として行政が仕掛け、行政が人を集めやったのでは、単なるアリバイ証明だ。変えないとだめ。意見を出し合うということは評論家ではない。自らがやることをやらせながら。一番問題なのはコーディネーターだ。あちこちの失敗例では行政がやる、長老がやるは失敗する。どういう議論がしやすくなるのかだが、難しい議論はいらぬ。文化財はこんなもんだよとか、みんなが将来にわたり、自由に使えるんだよといった風に意見を出す。それでこれがしたいと言ってくれるメンバーに集まってもらえばいい。うまくリードして最後はまとめる仕事になる。お金のかかることはできない。まとめ役が大事。人望があり、権力的でない人だ。観光では1年目は私がやったが、2年目は地元の2人にやらせた。私は、サポートにはいった。ワークショップでは行政も一員に入ってやった。出す意見は自分がやるようにした。やらない人はおのずと来なくなる。あちこちでやったが真庭市は成功していると思う。

江面会長) 市民に伝えるメッセージをもっているということと、最終的に住民が主体的に動ける形にしていけるかどうか。行政がやっているスタイルでは意味がない。人づくりである訳なので、人が育つということは自分でできるようになるということだ。行政はいかにも市民がやっているスタイルで、実は支えているという見識が必要。

山崎真委員)

ワークショップしてみないとわからないが、用途が決まっていなくて多目的に走ってしまうような気がする。

腰原委員)

一般教室を目指すのか、特別教室を目指すのかになる。必要最低限な機能もあるし、特別なものに対する機能もある。空間的にはそれに制約を受けるわけではない。文化財なので全部を変えることはできないとしても、中に入れる設備的には何が必要か、可搬性のある稼働できる調理器具なども考えられるかもしれない。今の状態ですべて使っていれば頑張れば何とかなるのか、これが無いとだめなのか。今、持ち込みで何とかなら試しに使ってもいい。それで足りるのなら備品として用意すればいい。建物の機能として必要となれば本格的に盛り込む必要がある。今、使いにくいところを知恵でできるようにすることに投資するのは問題無いと思う。青森美術館では前の展示会の備品を置いていかせる。それは美術館の備品になって、次の展示会の人が見に来て、これは残すこれは要らないというシステムだ。毎回撤去では無駄ですが、いろんな人がうまく使っている。アイデアが残されて機能が充実していく。公共工事で良くないのは初期投資が大きすぎるので、逆に不自由になる。要らない設備があったりする。使っている人が考えると、実は箱で十分だとなるかもしれないし、一方でこれは無くてはならないものも見えてくる。

山崎樹委員)

今更ですが、空調はどうなのでしょう。そこが整っていれば何でもできる。

腰原委員)

そこもスポットクーラーで済むのか、きちんとした設備がいるのか考えていかなければいけない。

山崎樹委員)

今まで使って、一番の課題は暑さ、久世の夏は暑いので。重要だ。

腰原委員)

それを調べるために、そこも使ってみて、何人ぐらいまでなら大丈夫だとか。

清水委員)

逆に使っていて問題が分ってきて空調をやるかどうかとか、選択肢がある。観光でもイベントで金をかければ良いということではない、行政の人はいい加減に使う場合があるが、それは自分がやるんだからねといいます。自分でおにぎりを握ろうと。

腰原委員)

それが全館空調にしようといった話になる。ランニングコストもかかる。

江面会長)

豊平館も空調が大きな設備だった。空調にはお金がかかるがやったらいいと思う。

岡本委員)

エスパスの池田事務局長の発案で、ダクトで温めて講堂でコンサートしたことがありますが、寒くなかったけど空気は良くなかった。

江面会長)

具体的に使い方の話ができたとする。まとめていただき次に具体的に話したい。次の会議は何日ですか。

事務局)

7月30日を予定しています。

江面会長)

ワークショップと使い方についても話したい。ぜひ言っておきたいことがありますか。

事務局)

ワークショップについて説明。

江面会長)

先ほどの意見があったようにやっていただきたい。

大塚課長)

7月8日に来ていただいた方に、場合により次の週に来てもらうという風に柔軟に対応したい。

江面会長)

押さえておく人選も事務局でよく考えてください。

澤山部長)

また相談させてください。

大塚課長)

まずは利活用の方法について、多くの方に使ってほしいと考えてやってきた。マルシェもやって県外からもたくさんきていただき、アンケートも報告したところです。携わってもらうことで興味も持ってもらえると思う。今年も机・椅子の塗装体験会も行った。版画展をしてもらったり、子供寄席をしたり多くの人に来てもらいたい。

岡本委員)

運動会ができないか。

江面会長)

若手の委員さんにも協力をお願いしたい。

清水委員)

提言骨子まとめがあるが、文化財保護の趣旨と目的、ここで議論した内容も分かりやすく入れてほしい。

大塚課長)

ご意見を盛り込んで市長に提言をもらうことになるので、盛り込みたい。

江面会長)

次の会議には出てくるのか。

大塚課長)

今回の意見を反映し、ワークショップの意見も入れたい。

清水委員)

ワークショップの前に提言骨子まとめと資料にあるけども。思想性みたいな内容も入れていただきたい。それをワークショップに示してほしい

大塚課長)

そうします。

江面会長)

また、次回も新しい意見を願いたい。議事は以上にします。

大塚課長)

県の横山参事から講評をお願いした

横山参事)

県の文化財担当課して言いますが、補強方法は活用の仕方によるので、今日は2案があるが、どう使うかによる。2階に重量物をあげるのだったらとか、活用の方法により選択となる。文化庁も耐震補強の考えを3ランクぐらい考えています。一つは倒れない。中に大量の人がいて活用する場合、大規模地震震度6強で倒れないレベル、或いは倒れても復元できるかというレベル。それか倒れても復元できるまでの間ですが、損傷は受けるが倒壊はしない、の3つになる。その辺から自ずと決まってきますし、建築基準法は適用除外なので、例えばこの地域の最大震度がどれぐらいで、それにあった耐震補強を考えるのかと思う。活用の在り方についてですが、施設には現況があり、どんどん使ってもらったらいいと思う。壊さなければいい。その中でいろんな活用方法を見出してもらえばいい。その後の活用についても現況の間取りを変えることはあり得ないと思うので、学校である以上、例えば教壇を取り外して活用するか、取り外さず活用するとか、厨房施設を外に作るとか。間取りを変えず現況の空間を保って利用してもらおうのがよいかと思っています。文化財の活用については、役所内でも考えがあり、活用の整備にはお金がかかると言われます。修理しただけで飾っておくものと思われているがそうではないと担当としても、事例を作りたいと思っている。遷喬以外にも事案があるので、一緒に考えていただきたいと思う。

大塚課長)

今回は7月30日で予定をお願いします。生活環境部長が4月で代わっていますので紹介します。

澤山部長)

世界、日本に誇れる財産として、生かし活用をしていきたい。

大塚課長)

最後になってしまいましたが、教育次長が綱島に、担当が佐山から岩野に代わっています。

奥山副会長)

第5回を迎えました。今日の会は今までと議論の中身が違ってきました。改めて大切なことは何かを考えてみると、「住民が楽しい」「ここに住む人が光を見せる」そのためのワークショップを実施する。ワークショップの参加者は町作りのよき理解者となり、ここで

光を見せる人になるはずです。この会はみんなで真庭の将来を考える会であり、一人一人が自分の人生を考える会でもあるのかとの印象も持ちました。真庭の宝この木造校舎を生かすことで住民の人生が豊かになるように、今後も活用について積極的にかかわっていただきたい。ご苦労様でした。

(終了 17:30)